

研修報告書 No. 6

所 属： 昭和医科大学病院

研修先： 高北病院

氏 名： 奈良 英莉香

2025 年 6 月、佐川町立高北国民健康保険病院にて 1 カ月間地域医療研修を行いました。日頃は都市部の基幹病院に勤務している私にとって、地域の医療現場を実際に体験することは非常に貴重な機会であり、多くの学びを得ることができました。

本研修では、内科外来と訪問診療を中心に研修を行いました。外来では総合診療科の先生を中心に、日常的に多くの高齢患者さんの対応がなされていました。高北病院では地域柄、患者さんのほとんどが高齢であり、基礎疾患を複数抱えている方も多く、慢性疾患のマネジメントが重要となっている印象を受けました。また、訪問診療にも同行させていただき、通院困難な方々に対してどのように医療を提供しているかを間近で学ぶことができました。

印象に残っている症例としては、「口角挙上および半身感覚障害」を主訴に来院された患者さんの診察があります。外来で医療面接や神経診察を行い、脳幹部の病変を疑い、精査目的に高知大学医学部附属病院へ紹介となりました。後日、「Wallenberg 症候群」と診断され、その後再び高北病院へ戻り治療が継続されました。私はこの患者さんの入院中の診察も継続して担当しました。急性期から慢性期への移行、そして地域での包括的なケアを 1 つの連続した流れとして経験できたことは非常に貴重であり、研修医としての診療能力の向上にもつながったと感じています。

研修を通じて、地域医療ならではの課題も肌で感じることができました。高北病院では少人数の常勤医師と、他院からの派遣医師で診療が行われており、診療体制としては決して余裕があるとは言えません。特に急性期疾患への即応性や、CT, MRI などの画像検査や読影に時間がかかる点は、都市部と比べて明らかな違いであり、地域医療の限界と現実を感じました。加えて、高知県全体では人口の偏在が著しく、中央部に医療資源が集中している一方、佐川町より西側の地域ではさらに深刻な医療資源の不足が予想されます。

一方で、地域医療の魅力や強みも多く感じました。院内では地域の方々が医師やスタッフと顔馴染みであり、診察中にも家族構成や生活背景に基づいた会話が自然に交わされていたことが非常に印象的でした。また、診療だけでなく「百歳体操」という高齢住民が体操や健康セミナーを通して集う会に参加した際、病院スタッフだけでなく、参加者が主体的に会の声かけや進行を行っていることに驚きました。このように病院と地域が垣根なく連携してコミュニティを築けるのは、日頃から互いの健康状態を気遣う地域住民通しの温かい繋がりがあからだろうと実感しました。

今回の研修を通して、都市部の医療とは異なる「地域に根ざした医療」の重要性と実際に学ぶことができました。特に慢性期医療や在宅医療においては、疾患そのものだけでなく、患者さんの生活環境や家族背景にまで踏み込んだ総合的な診療が求められ、それが患者さんの安心感や治療継続にもつながっていると実感しました。今後、医師として働く上で、今回学んだ「地域とのつながり」「患者を生活者として診る視点」は大切にしていきたいと考えています。

最後に、このような貴重な経験をさせていただいた高北病院の先生方、スタッフの皆様、そして温かく迎えてくださった佐川町の皆様に心より感謝申し上げます。